

# 作家の想いを伝えるために

フランス文学翻訳家 高橋 啓さん

今回、私たちは本校の卒業生で、フランス文学翻訳家の高橋啓さんにインタビューを行った。

高校生の頃から現在に至るまでの高橋さんの経験、中でも「翻訳家」という仕事の話や、高橋さんが翻訳家になるまでの経緯などを伺った。インタビューは、時折笑いを交えながらの、終始和やかな雰囲気です。

## アルジェリアでの経験

高橋さんの印象に残っている出来事はアルジェリアでの通訳の仕事だという。大学卒業後、高橋さんは教科書出版社に勤めていたが、フランス語を学び直したいという思いがあり、また家族を養っていくため、仕事を辞め通訳として旧フランス領であるアルジェリアに渡ったそうです。



〈高橋さんのプロフィール〉  
1953年、帯広市生まれ。本校の第22期卒業生。早稲田大学文学部仏文科を卒業。フランス文学翻訳家。訳書に『仕立て屋の恋』（ジョルジョ・ミムノン・著／早川文庫）、『音楽への憎しみ』（パスカル・キニヤール・著／青土社）などがある。

高橋さんの仕事は、日本の会社からの連絡を電話で現地の人に伝えることだったそうだが、その電話は砂嵐で中々繋がらず、繋がっても出てくるのはフランス語のわからない掃除婦だったという。高橋さんは「相手の言葉は機関銃のように感じるし、辞書を引いている暇もないから毎日大変だった。しかし楽しいこともあったから、ごちゃ混ぜにしたら面白い経験だった」と当時を振り返る。

帰国後高橋さんは翻訳会社に勤めたが、三十代で独立しフリーの翻訳家になったという。高橋さんはアルジェリアでの経験を「人生の最大のハイライトだった。それがなかったら翻訳家になっただろうかもしれない」と話した。

## 翻訳で大切なこと

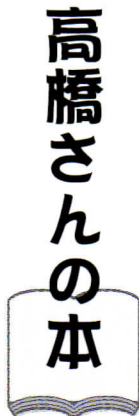
そもそもなぜフランス文学の道に進んだのか。意外にもそれはシンプルな理由だった。大学の第二外国語



『辺境の館』パスカル・キニヤール・著／青土社

夜、美少女ルイーザの夢の中に現れる死んだ夫の霊。彼の語りかけはルイーザを壮絶な復讐に誘う。

ポルトガルの庭園にあるタイル画をもとにして生まれたこの作品。ルイーザの奇想天外な行動や、サクサク進んでいく物語に思わず息を呑み、惹きつけられる一冊である。



『うそとホント』パウル・ベリッシュ・著／NHKブリヂュ出版

哲学用語を使わない哲学書。この本は、うそとは、しあわせとは何かをテーマに、簡単な言葉や例を用いて考えていく本である。この二つのテーマは「これだ」という正解はない。また、何歳になっても付きまとう悩みである。本書を読んで今一度考えてみてはいかがだろうか。